

## 不登校児童・生徒を対象としたキャンプ療法の効果

### The Effects of Therapeutic Camp for non School Attendance Children and Adolescents.

兄 井 彰

Akira ANII

(保健体育講座)

(平成12年9月11日受理)

#### 0. はじめに

文部省がまとめた平成12年度学校基本調査・初等中等教育機関・専修学校・各種学校編によると、心理的原因などで登校できない「不登校」で、長期欠席（一年間に30日以上欠席）した子どもは、小学校2644人、中学校では10万人を越える10,464人、合計130,208人であった。国や都道府県は、この不登校問題に対して、適応指導教室を設置したり、スクールカウンセラーとして臨床心理士を学校・教育事務所に派遣したり、さらに、学生などのスクールアドバイザーの配置を行ったりと、さまざまな対策を講じている。また、民間においても、フリースクールや体験教室などで、不登校児童・生徒に対する支援や援助を行う気運が高まっている。

このような不登校問題の対策の一つとして、適応指導教室の設置と共に、1990年代以降、盛んに実施されているのが、キャンプ（自然生活体験）療法である（真仁田, 1993）。このキャンプ療法が、情緒障害児や不登校児童・生徒にさまざまな効果があることは、古くから知られている（真仁田・堀内, 1973; ロジャース, 1966; スラブソン, 1956）。1989年に富山県総合教育センターが、全国の教育研究機関を対象にして行った登校拒否児童・生徒のためのキャンプ活動の実施状況についての調査（島田・神保・北川・安村・村久保・松井・栗山・長谷川・吉田, 1990）では、158箇所中、19箇所で開催されていた。1995年に同様の教育研究機関を対象に行われた調査（島田・保坂, 1996）では、178箇所中、55箇所、約3倍増と

なっている。さらに、国立オリンピック記念青少年総合センター（1998）が全国の3,700以上の教育機関に調査した結果では、不登校児童・生徒を対象に170事業も実施されており、その大半が、キャンプ・野外活動を含む宿泊研修であった。

このような集団宿泊体験を含むキャンプ療法が、不登校児童・生徒の行動改善に効果的である理由として、飯田（1994）は、①親や家庭を離れていての生活体験、②自然の中での生活体験、③小集団での共同生活体験、④キャンププログラムにおける成功体験を子どもたちが能動的に体験できることをあげている。このようなキャンプに参加する不登校児童・生徒は、親子関係で何らかの問題をかかえている場合が多く、親や家庭から離れることによって、子どもと親の関係を両者が冷静に見つめ直す機会を持つことが出来るのである。また、自然の中で生活することは、精神的な解放感を感じ、心の癒しを促進させる効果があり、加えて、同じ問題をかかえる仲間や心許せるスタッフとの共同生活は、不登校児童・生徒が苦手とする健全な人間関係や友人関係を構築する機会を与えてくれる。さらに、野外でのキャンプ生活は、肉体的にも精神的にもストレスのかかるプログラムが多いが、そのプログラムを完遂する成功体験は、子どもの自己有能感を高め、以後の行動に変化が現れると考えられる。

また、高橋（1993）も、Gibson（1979）が多くの治療キャンプの報告から、その治療原理について、①自然そのものの持つ性質、②グループ経験、③学習理論の3点としていることを踏まえた上で、不登校児童・生徒を対象にしたキャンプ療法の特

徴として、①現実から隔離された自然環境での生活、②短期間で集約的な活動、③対人場面に適応するなどの集団による課題解決、④ストレスや困難を伴う活動をやり遂げる冒険体験をあげ、その有効性を強調している。

以上のように、不登校児童・生徒に対して、種々の効果が見込まれるキャンプ療法について、10年以上前から比べると（飯田，1987），多くの研究報告がなされている。これらの研究報告の紹介は、稲村（1994）が行っているが、個々の事例が列挙されているにすぎず、総括的に分析を加えた研究は見あたらない。

そこで、本論文では、現在、収集可能な実践的な研究報告を検討し、不登校児童・生徒に対するキャンプ療法の効果について明らかにすることを目的とする。その分析項目として、①キャンプの目的、②参加者・スタッフ、③キャンプの内容、④キャンプの評価を設定し、考察を加える。

## 1. キャンプの目的

初期の研究報告では、情緒障害児全般を対象にしたキャンプ療法であり、不登校児童・生徒のみを対象としていない（日下部，1983；倉本・斎藤・打木・池上・中島・岩橋・藤光・関川・稲村，1989；黒田・村田，1970；中島，1982；真仁田・堀内，1973；竹内，1975）。これらのキャンプは、情緒障害児の日常生活における行動改善を目的としている。例えば、倉本ら（1989）は、①大自然の中で心身の浄化をはかる、②集団のレクリエーションなどにより活動意欲を高める、③集団生活により対人関係の改善をはかる、④思春期、青年期のための他の療法と有機的に結びつけることを主な目的としている。また、黒田（1973）も、キャンプの目的として、集団所属に基づく安定感を高め、社会性を促進し、現実生活への適応性を高める効果を求めることをあげている。

最近の研究報告（奥山・諫山・加藤之・齊藤・菊地・森，1999a；1999b；相馬・松元・斎藤・山口・佐藤・荒井，1995；角田・島田・保坂，1997など）では、不登校児童・生徒の増加と深化により、不登校児童・生徒のみを対象としたキャンプが多い。その目的も、直接的に児童・生徒の再登校ではなく、キャンプ活動を通して、対人不安感や集団不適応感を軽減・解消し、対人関係の変容を促すとともに、自主性や社会性を育成することである（今村・北川・山本・松井・佐藤・渡辺・石黒・吉田，1992）。児童・生徒の再登校あるいは

は学校への復帰は、このようなキャンプの関係者にとって関心の的であろう。しかし、飯田（1998）も指摘するように、キャンプ療法の真の目的は、「心の居場所」を確保し、これからの社会で生きて行くために必要なスキルを身に付けることであり、学校への復帰は、一部の不登校児童・生徒に見られる二次的産物と捉えることが適切である。

また、不登校児童・生徒の親の養育態度やその親子関係を改善する目的で行われているキャンプも数多く報告されている（飯田・中野・関根・布目，1993；黒田・村田，1970；中島，1982）。例えば、角田ら（1997）は、①豊かな自然環境の中で、学校では得がたい各種の生活体験を通して、不登校児童生徒の自主性を回復させるだけでなく、②家庭における親子の意志疎通の在り方について考えさせることを目的としている。

実施されたキャンプ療法の目的を、全体的に見ると、児童・生徒を取り巻く広い意味での社会（地域社会や家庭など）との適応を促すための体験的な人格の核づくりを目指していると言える。

## 2. キャンプの参加者と実施スタッフ

### 2. 1. キャンプの参加者

本研究で分析対象にしたキャンプ療法の主な参加者は、当然、不登校傾向を示す児童・生徒であるが、前述の通り、初期のキャンプは、情緒障害児と合同して行われ、緘黙傾向や集団不適応、チックなどを示す子どもも参加している（倉本ら，1989；黒田・村田，1970；中島，1982；財満，1991など）。また、主に不登校児童・生徒を対象としていても、統合キャンプとして健常児と一緒にキャンプ活動を行わせている報告も多い（飯田・小島・有坂，1991；飯田・松原・小田・沢崎，1990；飯田・坂本・石川，1990；幼少年キャンプ研究会，1992）。その理由として、一般中学生と一緒に生活することで、「自分も普通の中学生と変わらない」と思えるようになることが重要であることをあげている（飯田，1994）。

不登校児童・生徒のみが参加したキャンプ（池田・吉井，1991；池田・吉井・桐山・長野・石田・永皆1992；相馬ら，1995；奥山ら，1999 a；1999 b）も多く実施されている。これらのキャンプは、お互いの立場や胸のうちを理解したり、慰め励まし合ったりする点で効果があると思われる。

さらに、保護者も児童・生徒と一緒に参加しているキャンプも多い（金森・金森・浜本，1993；1994 a；1994 b；金森・金森・浜本・長谷川，1995

高橋・井田・浦部・倉澤・小泉, 1993; 高橋・井田・吉野・伊藤子・吉田, 1994; 角田ら, 1997)。これらのキャンプでは、親が子どもに対する認識を変える契機を与え、親の養育態度や親子関係改善に効果あると思われる。しかし、保護者への依存が高い子どもの場合は、その依存をキャンプの中に持ち込み、家庭と変わらない状況下での活動となり、かえって、逆効果になる場合も考えられる。

参加者の学年については、小学校高学年から中学校、高校生と全般に渡っているが、中学生を対象とするキャンプ数が多く、現在の不登校問題が中学生で深刻であることが反映されているよう。しかし、現在、不登校傾向が小学生低学年まで低年齢化してきていることから、これからは、小学生を対象にしたキャンプ療法も必要になると考えられる。

## 2. 2. スタッフ

多くのキャンプでは、推進委員会（会議）を設立し、そこで企画運営の基本方針を決定され、それに基づき実施スタッフが実際のキャンプ活動を実施する形態が取られている（相馬ら, 1995など）。

実施スタッフを見ると、大学教員、教育委員会関係者、各施設の職員、小・中学校教諭、大学院生、学生、一般ボランティアと多くの人々の関与が見られる。その中には、キャンプ活動を習熟していないスタッフも含まれている（福岡県教育委員会, 1998; 1999; 2000など）。このことは、実施方針が明確に提示されており、そのことを理解した上で、子どもと接し、キャンプを一緒に楽しもうとする態度を示すスタッフであれば、一定程度の効果が期待できることを示している。

## 3. キャンプの内容

### 3. 1. 実施形態・日数

キャンプ療法の基本的な実施方法としては、事前の説明会や予備キャンプ（飯田・真仁田・小島・松原・小田・沢崎, 1992など）を行い、それに引き続いて本キャンプを実施するという形態が取られている。これは、サマーキャンプのように、日常生活とは異なる生活体験を、一時的に海や山などの自然が豊かな環境の中で行わせるためである。

その本キャンプも、2週間以上（日下部, 1983）から、2泊3日という短期（大沢・西田・財満・東方田・岩崎, 1990）までと、さまざまな期間設定がなされている。これは、これまで適切な実施

期間が何日であるのかという明確な知見は見出されていないためであろう。しかし、概して、キャンプ療法は、その実施期間が長期になるほど効果が顕著であると考えられており、最低でも4泊5日は必要であるという指摘（飯田, 1998）もある。経験的に見ても、長期キャンプの方が児童・生徒への効果が多いと思われることから、なるべく長期の実施が必要である。

また、サマーキャンプなどの単発で実施されるのではなく、年間通して、数回実施されるシリーズキャンプの報告も数多い（福岡県教育委員会, 1998; 1999; 2000; 相馬ら, 1995; 高橋ら, 1993; 高橋ら, 1994; 角田ら, 1997)。このシリーズキャンプの利点として、子どもやスタッフが顔を合わせる機会が多く、回数を重ねることに、親密な人間関係を築くことが可能となる。また、共感を持つ子ども同士が友達になる機会が確保でき、シリーズキャンプ以外でも一緒に遊ぶなどの活動範囲や人間関係の広がりが期待できる。その点でも、一回きりのキャンプ療法ではなく、何らかのかたちで、子ども同士やスタッフが関わり合う機会を持つことが必要であると思われる。

### 3. 2. キャンププログラム

実際の不登校児童・生徒のキャンプ療法におけるプログラムは、多岐に渡っており、それぞれのキャンプで、どのプログラムに重点を置くのかで、時間の割当も異なっている。

国立オリンピック記念青少年総合センターが行った不登校児童・生徒を対象にした自然体験活動に関する調査（1998）によると、実施されたプログラム内容は、①野外活動（自然探索）型、②野外活動（冒険）型、③野外活動（野外炊飯重点）型、④レクリエーション型、⑤芸能鑑賞・文化活動型、⑥スポーツ体験型、⑦クラフト体験型、⑧社会見学型、⑨選択肢多形型、⑩複合型（日帰り中心）、⑪複合型（宿泊中心）、⑫ボランティア型に分類で出来るとしている。また、実際の活動内容は、野外活動では、野外炊飯や登山・ハイキング、キャンプファイヤー、テント生活、自然観察などであり、屋内活動としては、クラフト、楽器演奏などが行われていた。さらに、スポーツとしては、ニュースポーツ、水泳、カヌー・カッター、乗馬などであり、その他、発表会・懇親会・講義等も行われていると報告されている。

本研究で収集した研究報告においても、プログラムの中心は、野外活動であり、特に、長期間自然環境の中で生活するキャンプの成果報告が多い

(飯田ら, 1990; 飯田ら, 1992; 奥山ら, 1999a; 1999b など)。また、仲間づくりを目的としたレクリエーション活動を中心としたキャンプも見られる(財満, 1991)。

しかし、最近では、一回のキャンプの中に、野外活動やスポーツ、社会見学など複数の異なるプログラム内容を実施する複合型のキャンプ(生活体験活動)が実施されている(福岡県教育委員会, 1998; 1999; 2000; 相馬ら, 1995; 高橋ら, 1993; 高橋ら, 1994; 角田ら, 1997)。これらのキャンプは、先述の通り、シリーズキャンプで、家庭に引きこもりがちの子どもたちに、年間を通してさまざまな活動を体験させることが出来る点で有効であると考えられる。

これからのキャンプ療法のプログラムは、自然体験活動を含む多様な体験を子どもたちに保証できるような方針で内容の決定がなされることが必要である。

#### 4. キャンプの評価

上記のように不登校児童・生徒の行動変容に効果があると考えられているキャンプ療法の、いろいろな方法で、評価が行われている。その評価の中心的な方法は、児童・生徒の行動観察であり、その他、精神医学・心理学的なテストなどが併用されている。例えば、金森・金森・浜本・長谷川(1995)では、不登校児の親子関係に焦点を置き、カウンセリングの経過等の詳細な事例報告を行っている。また、池田・吉井(1991)は、キャンプ活動自体を現象学的に詳細に言語化しており、キャンプの流れ自体を時間的に追えるような報告を行っている。さらに池田ら(1992)は、子どもと親や教師といった「タテ関係」の体験だけでなく、仲間同士の「ヨコ関係」の体験が、不登校児童・生徒には大切だとして、キャンプ活動における「ヨコ関係」の体験について、観察報告を行っている。このように、不登校児童・生徒を対象にしたキャンプ活動の評価は、児童・生徒の行動観察が、中心である。その理由としては、キャンプ活動の目的が、自然体験などを通して、子どもの対人関係能力を高め、自主性・自立性を育むといった行動変容であることから、当然であろう。しかし、上記の報告や研究では、行動観察による個人の事例報告がほとんどであり、キャンプ終了後の登校状況を除いて、キャンプ参加者の行動の変容を全体的に調査・集計し、評価をしている報告ほとんど見られない。

キャンプ療法の評価は、このようなキャンプを実施するための貴重な資料を与えてくれるだけでなく、キャンプ実施の社会的な意味を明確にするために大変重要である。そのためにもキャンプの効果を、多面的に評価することは重要である。しかし、評価のためにキャンプ実施に支障を来すようなことは避けなければならない。そのためにも、多忙なキャンプ活動の中でも実施が可能な効率のよい評価方法の確立が必要である。

#### 5. まとめ

本研究では、最近盛んに実施されされている不登校児童・生徒に対するキャンプ療法について、過去の研究報告の分析から、その効果を明らかにすることを目的とした。

これらの多くのキャンプ療法で、不登校児童・生徒に一定の効果があり、それは、スタッフの献身的な子どもへの関わりと多様な活動体験が基盤となって現れて来るものであると理解できる。

しかし、本研究の分析基準であった①キャンプの目的、②参加者・スタッフ、③キャンプの内容、④キャンプの評価のそれぞれにおいても、各キャンプで統一した見解が示されておらず、効果的なキャンプ療法の実施方法も確立されていないのが現状であろう。今後、さらなる実践と研究を行い、効果的なキャンプ療法の実施方法を検討していかなければならない。

最後に、このようなキャンプ療法に参加した不登校児童・生徒は、飯田(1998)も、指摘するように、参加すること自体で、引きこもり状態から社会参加へと大きな障害をクリアしたことになる。すなわち、子どもたち自体が、今の自分の状態を変えようとする意志を持ち、キャンプに参加するため、このキャンプ自体が社会復帰の踏み台的な効果を持つ。しかし、不登校児童・生徒の増加に従い、このような子どもたちだけではなく、もう少し重篤な引きこもり状態にいる子どもたちにも、何らかの手だてを施す必要があろう。キャンプ療法も、その手だてとなる可能性を秘めていることから、全般的な不登校児童・生徒を対象にした、具体的な実施方法の検討を進めていかなければならないと思われる。

## 引用文献

- 福岡県教育委員会 1998 玄海! ハート to ハートキャンプ報告—不登校の子どもたちのためのリフレクシュプログラム— pp.84.
- 福岡県教育委員会 1999 玄海! ハート to ハートキャンプ報告—不登校の子どもたちのためのリフレクシュプログラム— pp.100.
- 福岡県教育委員会 2000 玄海! ハート to ハートキャンプ報告—不登校の子どもたちのためのリフレクシュプログラム— pp.98.
- 飯田 稔 1987 キャンプによる合宿訓練 教育心理 9, 718-721.
- 飯田 稔 1994 キャンプ療法 児童心理10月号臨時増刊 金子書房, 135-138.
- 飯田 稔 1998 登校拒否児等を対象にしたキャンプ療法の意義 国立オリンピック記念青少年総合センター (編) 登校拒否等青少年の問題行動に関する調査研究報告 Pp.31-37.
- 飯田 稔・中野友博 1992 登校拒否児中学生の不安と自己概念に及ぼすキャンプ療法の効果について 筑波大学運動学研究 8, 69-79.
- 飯田 稔・小島 哲・有坂 正 1991 登校拒否中学校のキャンプ集団における社会性と登校状況の変化 筑波大学運動学研究 7, 1-7.
- 飯田 稔・松原達哉・小田 晋・沢崎達夫 1990 登校拒否児に対するキャンプ療法の効果に関する実験的研究 マツダ財団研究報告書 3, 1-15.
- 飯田 稔・真仁田昭・小島 哲・松原達哉・小田 晋・沢崎達夫 1992 登校拒否児に対するキャンプ療法の効果 伊藤忠記念財団調査研究報告書 23, Pp.178.
- 飯田 稔・中野友博・関根 章文・布目靖則 1993 登校拒否児中学生に対する3年間の実験キャンプが親子関係に及ぼす影響 筑波大学運動学研究 9, 37-47.
- 飯田 稔・坂本昭裕・石川国広 1990 登校拒否中学生に対する冒険キャンプの効果 筑波大学体育系紀要 13, 91-90.
- 池田博和・吉井健治・桐山雅子・長野郁也・石田智雄・長峰伸治 1991 登校拒否に関する研究 (第・報) —不登校生徒との合宿体験— 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学) 38, 137-154.
- 池田博和・吉井健治・桐山雅子・長野郁也・石田智雄・長峰伸治 1992 不登校性との合宿体験—「ヨコ体験」合宿のころみ— 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学) 39, 45-61.
- 今村秀次・北川 敬・山本美智子・松井博邦・佐藤 隆・渡辺宣昭・石黒正秀・吉田 洋 1992 学習等不適応児童生徒の指導に関する調査研究 (第9報) —登校拒否児童生徒のための効果的な集団指導の実践研究— 富山県総合教育センター研究紀要 10, 109-136.
- 稲村 博 1988 登校拒否の克服 新曜社 Pp.219-233.
- 稲村 博 1994 不登校の研究 新曜社 Pp.380-384.
- Gibson, P. M. 1979 Therapeutic aspects of wildness programs: A comprehensive literature review. Therapeutic Recreational Journal, 13(2), 21-33.
- 金森正臣・金森喜久子・浜本孝子 1993 「野外塾 3」(1992. 公開講座) について—不登校児の親子の野外活動・3— 愛知教育大学自然観察実習園報告 14, 1-24.
- 金森正臣・金森喜久子・浜本孝子 1993 「野外塾 2」(1992. 公開講座) について—不登校児の親子の野外活動・2— 愛知教育大学自然観察実習園報告 13, 57-89.
- 金森正臣・金森喜久子・浜本孝子・長谷川千里 1994 「野外塾 2」(1992. 公開講座) について—不登校児の親子の野外活動・2— 愛知教育大学教科教育センター研究報告 19, 67-76.
- 金森正臣・金森喜久子・浜本孝子・長谷川千里 1995 登校児の親子の野外活動・4 愛知教育大学教科教育センター研究報告 19, 67-76.
- 国立オリンピック記念青少年総合センター (編) 1998 登校拒否等青少年の問題行動に関する調査研究報告 pp.116.
- 倉本英彦・斎藤 環・打木 悟・池上恭司・中島聡美・岩楯公晴・藤光純一郎・関川俊男・稲村 博 1989 思春期青年期事例における短期合宿療法 思春期学 7, 359-365.
- 黒田健次 1973 登校拒否児の治療訓練キャンプ 児童精神医学とその近接領域 14, 55-74.

- 黒田健次・村田政次 1970 情緒障害児の実態とその予後に関する研究—情緒障害児の家族合同キャンプおよび合宿治療を中心に— 臨床心理学研究 9, 155-167.
- 日下部康明 1977 登校拒否に対する特殊な治療体験—2週間合宿について 精神療法 3, 263-266.
- 日下部康明 1983 合宿による治療 内山喜久雄(編) 登校拒否 金剛出版 Pp.171-180.
- 松原達哉 1992 キャンプによる登校拒否児童の指導 教育創造 日本教育文化研究所 26, 7-13.
- 真仁田昭 1993 「登校拒否」対応への課題 児童心理 6, 1-9.
- 真仁田昭・堀内 聡 1973 情緒障害児のためのキャンプ療法に関する研究 教育相談研究 13-32.
- 中島利夫 1982 情緒障害児キャンプの試み(1) 保健の科学 24, 54-58.
- 仁科茂教 1975 登校拒否児の合宿指導について 日本応用心理学会42回論文集 42, 5-6.
- 西村良二・岡村克己・堤 龍喜・井上隆則・新保友貴・堤 啓 1987 精神経誌 1035-1036.
- 奥山 洸・諫山邦子・加藤敏之・齊藤詔司・菊地和孝・森 敏隆 1999a キャンプ経験が不登校生徒に与える心理的影響 野外教育研究 3, 25-36.
- 奥山 洸・諫山邦子・加藤敏之・齊藤詔司・菊地和孝・森 敏隆 1999b キャンプの個別プログラムに対する不登校生徒の評価 環境教育研究 2, 19-26.
- 大沢多美子 1987 登校拒否児へのキャンプの試み—第1回思春期ふれあいサマーキャンプ 広島医学 40, 869.
- 大沢多美子・西田行壯・財前義輝・東方田邦芳・岩崎 学 1990 思春期不登校児のための活動集団療法—サマーキャンプを中心に— 集団精神療法 6, 135-140.
- ロジャース, C. R. 1966 問題児の治療 小野 修(訳) 岩崎学術出版, 東京. (C. R. Rogers 1939 The clinical treatment of the problem child. Houghton Mifflin.) Pp.256-283.
- 島田裕之・保坂 亨 1996 登校拒否(不登校)児童生徒を対象とした自然体験宿泊活動についての実態調査 千葉大学教育学部教育相談研究センター年報 13, 101-136.
- 島田芳一・神保和子・北川 修・安村 駿・村久保雅孝・松井博邦・栗山正夫・長谷川進・吉田 洋 1990 学習等不適応児童生徒の指導に関する調査研究(第7報)—登校拒否児童生徒のためのキャンプ指導の基礎研究— 富山県総合教育センター研究紀要 8, 119-148.
- スラブソン, S. R. 1956 集団心理療法入門 小川太郎・山根清道(訳) 誠信書房, 東京. (S. R. Slavson 1943 An introduction to group therapy. The Commonwealth Fund: New York.)
- 相馬 実・松本昌治・斎藤英男・山口善子・佐藤義隆・荒井一郎 1995 登校拒否児童生徒自然体験推進モデル事業・ 南教育センター研究紀要 8, 12-25.
- 高橋宜英・井田廣司・浦部豊子・倉澤由之・小泉美子 1993 登校拒否児童生徒の変容をめざしたキャンプ療法プログラムの開発 群馬県総合教育センター研究報告書 141, 71-93.
- 高橋宜英・井田廣司・吉野繁夫・伊藤洋子・吉田知子 1994 登校拒否児童生徒の変容をめざしたキャンプ療法プログラムの開発—一親の子供とのかかわり方に視点を当てて— 群馬県総合教育センター研究報告書 146, 243-266.
- 高橋知音 1993 キャンプ療法における登校拒否児の樹木画の変化 カウンセリング研究 26, 19-28.
- 竹内 清 1975 学校嫌いはキャンプで治る 黎明書房 東京 Pp.272.
- 土田 博・野手憲二・北川 敬・山本美智子・馬場百々子・村久保雅孝・長谷川進・北岡 勝・寺田憲和・吉田 洋 1991 学習等不適応児童生徒の指導に関する調査研究(第7報)—登校拒否児童生徒のための集団による適応指導(キャンプ指導等)の実践研究— 富山県総合教育センター研究紀要 9, 109-136.
- 角田和也・島田裕之・保坂 亨 1997 不登校児童生徒を対象とした自然体験宿泊活動の実際 千葉大学教育実践研究 4, 87-101.
- 財満義輝 1991 登校拒否生徒に対する活動集団療法—レクリエーション活動の導入とその治療的意義 広島修道大学臨床心理学研究 創刊号 105-113.